第366回史跡めぐり

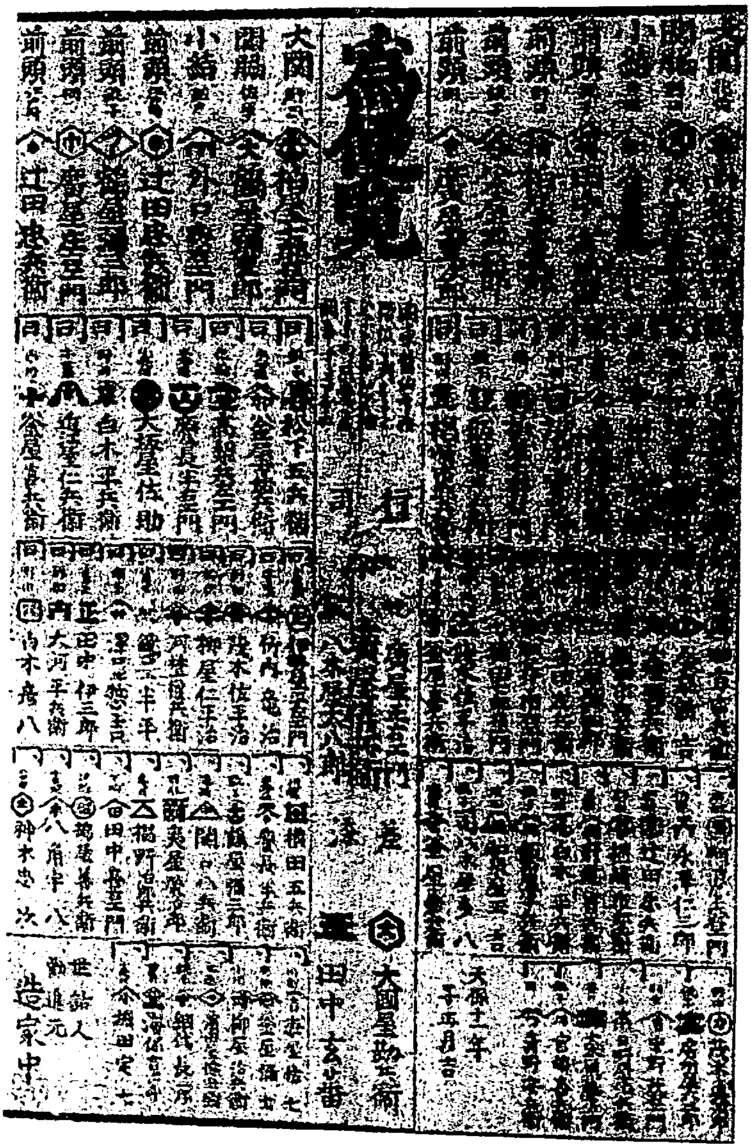
醤油がつくった野田の文化と歴史

NPO法人・越谷市郷土研究会主催

平成19年4月27日（土）

集合場所　北越谷駅

案内　会友木原徹也

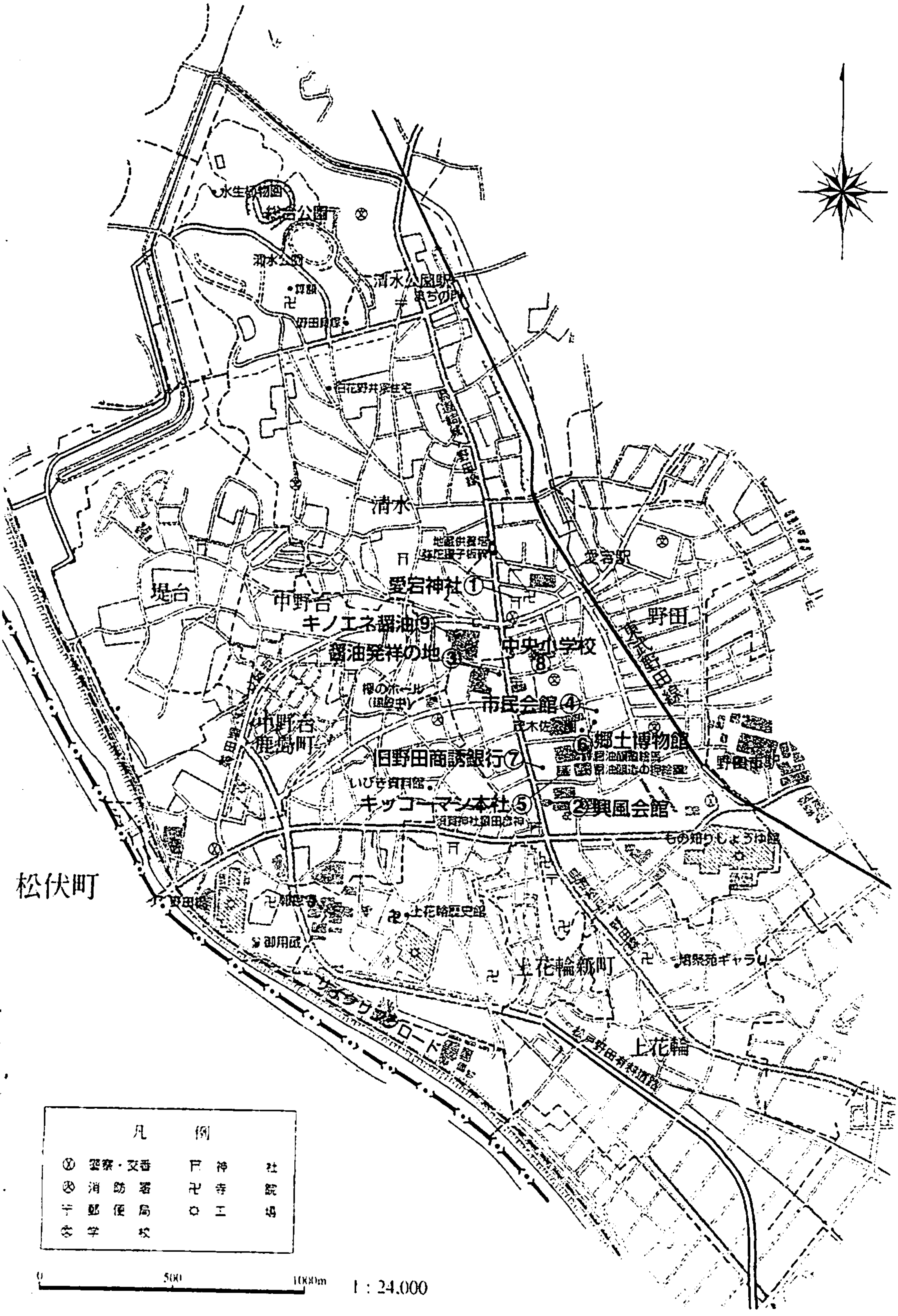


コース

北越谷駅(8:43 発)→「愛宕神社」下車→愛宕神社・勝軍地蔵堂→野田の醤油発祥の地→野田の旧市街→興風会館→キッコーマン本社付近（本店跡・茂木本家・七店家・給水塔など）→野田市郷土博物館→市民会館（昼食・休憩　12:00~12:45）→キッコーマンもの知りしょうゆ館→上花輪歴史館→下河岸廻船問屋跡（桝田家）→キッコーマン御用蔵→「上岸」乗車(16:42 発)→北越谷駅

〔全体で 5 km 弱〕

表紙=天保 11 年〔1840〕当時の醤油番付。東の大関　高梨兵左衛門はじめ野田・上花輪〔現野田市〕の造家名が多く載っている。



水生植物園
清水公園
清水公園駅
清水
堤台
中野台
愛宕神社①
キノエネ醤油⑨
醤油発祥の地③
中央小学校⑧
市民会館④
⑥郷土博物館
旧野田商誘銀行⑦
キッコーマン本社⑤
②興風会館
愛宕駅
野田
東武野田線
野田市駅
中野台鹿島町
もの知りしょうゆ館
上花輪歴史館
上花輪新町
上花輪
松戸野田有料道路
松伏町
凡例
警察・交番
消防署
郵便局
学校
神社
寺院
工場
0
500
1000m
1 : 24,000

野田の歴史ダイジェスト

《原始》

野田の地に、一体いつごろから人が住み始めたのかは不明ですが、26,000年ほど前には人が生活したことが発掘された石器等から分かっています。

市内には、国指定史跡の「山崎貝塚」をはじめ、縄文時代（約12000年～2500年前）の貝塚が多く発見されています。

これは、昔、野田の地まで海岸線が迫っていたことを示しています。

国指定史跡の「山崎貝塚」には無数の貝殻など確認することができます

弥生時代（約2500～1700年前）に入ると、暮らしは稲作を中心としたものに変わっていきます。市内では、この時代の墓跡や集落跡が発見されています。

《古代》

弥生時代以降、力をつけてきた地方の豪族は、主に農耕に従事しながら自己の勢力拡大を図っていました。

しかし、野田地方の古墳時代（約1700～1300年前）では、古墳が少なく、小規模なので豪族の力はそれほど強くなかったようです。

4世紀ごろになると、手賀沼周辺に前方後円墳・前方後方墳が築かれるようになったことから、この地にも大和朝廷の力が及ぶようになったことが推測されます。

6世紀前後には、国造の支配下に置かれ、国家の中央集権制に組み込まれていったと思われます。

大化2年(646)に国司、郡司が置かれ、大宝元年(701)には大宝律令が制定されますが、それ以降、野田一帯は下総国葛飾郡に統括され、同郡栗原郷（現在の市川市国府台付近）に置かれた国府（現在の県庁にあたる）の支配下に入ったと思われます。

10世紀中ごろ、平将門の乱（天慶の乱）が起こると、野田地方も一時、将門の支配下に属したと思われます。

《中世》

12世紀前半、野田市域の大部分は現在の茨城県古河市から埼玉県三郷市に至る広大な荘園である下河辺荘（しもこうべのしょう）に編成されます。

この荘園を開発した下河辺氏は、後に「吾妻鏡（あづまかがみ）」の中で源頼朝（よりとも）の側近としてしばしば登場しますが、得宗（とくそう）北条氏体制が固ま

っていく過程で政治の表舞台から姿を消してしまい、下河辺荘も金沢北条氏と称名寺が支配します。

得宗滅亡後、下河辺荘は鎌倉公方足利氏のものとなり、公方が古河に遷ってからもその御料所として、重臣である簗田氏や野田氏の活躍する舞台となりました。

《江戸時代》

天正18年(1590)、徳川家康は豊臣秀吉の命によって、関東八か国を支配することになり、譜代の家臣岡部内膳正長盛に、下総・上総の地にあわせて一万二千石を与えて大名に取り立てました。

飯田市郎兵衛家の蔵があった場所

長盛は、下総国葛飾郡山崎(現在の野田市山崎)の地に入部し、翌年には領内である堤台に「城」を築き、慶長14年(1609)に丹波国亀山(現在の京都府亀岡市)に移るまでの19年間を野田で過ごしたと言われています。

一方、岡部長盛が入部するのと前後して、野田の産業として大きく発展していく醤油づくりが始まったとされ、一説によれば、永禄年間(1558~70)に飯田市郎兵衛家の先祖が初めて溜醤油を造ったと伝えていますが、詳細は不明です。

「大日本物産圖絵~下総國醤油製造の圖」(三代目・歌川広重・1877)

しかし、記録によると、醤油醸造が始まったのは江戸時代に入ってからで、上花輪村の名主高梨兵左衛門家が寛文元年(1661)に開始したとあります。

野田で醤油づくりが発展したのは、地理的特性によります。江戸川の開さくや承応3年(1654)、下総栗橋~関宿間の赤堀川の通水成功(利根川の付替完成)により、野田は一躍、川舟による交通至便の地となりました。これにより関東でとれた大豆や小麦、行徳の塩といった原料を容易に運び込み、大消費地である江戸に製品を送ることが可能になりました。

文政7年(1824)の記録では、野田地区の醤油醸造家は19軒を数えるに至っています。

《明治時代》

明治4年（1871）、廃藩置県により野田市域は印旛県に、さらに明治6年（1873）には木更津県と印旛県が廃止され、千葉県になりました。

また、明治22年（1889）には、市制町村制の実施により、野田町、梅郷村、旭村、七福村、川間村が誕生しますが、明治期に入り、交通網の発達によって野田の基幹産業であった醤油醸造業も一躍発展していきます。

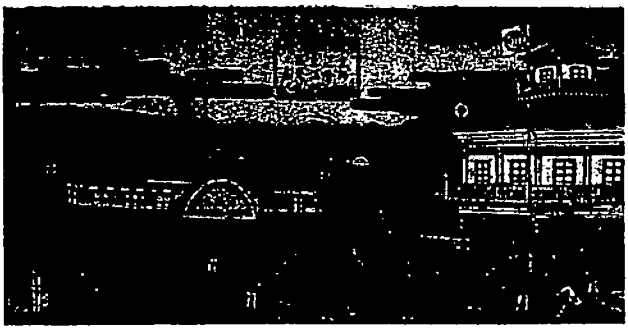
江戸川を行く通運丸（明治時代）

明治10年（1877）、内国通運の外輪船「通運丸」が両国橋から本所竪川筋を経て江戸川に入り、利根川筋の大越まで就航。

その後も関宿を経て、境、佐原、銚子などに至る航路も開かれ、江戸川の水運は活況を呈しました。

県営鉄道野田停留所

さらに、明治44年（1911）、野田～柏間に開通した千葉県営軽便鉄道などや自動車などが発達。一方、明治20年（1887）に野田醤油醸造組合が設立され、醤油業の発展に大きく貢献しました。



「東京両國通運会社川蒸汽往復盛栄真景之圖」

《大正時代》

第一次世界大戦（大正３～７年）の影響による好景気により、野田の醤油醸造業もかつてない好況を呈するようになりました。

しかしその一方で醸造業者は、それまでの手作業中心の醸造法や昔ながらの経営方針を見直す必要が生じてきたため、大正

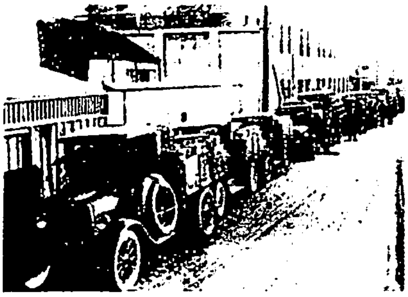
6年（1917）、醸造家8家が合同して「野田醤油株式会社」を設立。近代企業化を進めていきました。

醤油工場と河岸を往来した人車鉄道

一方、野田～柏間の千葉県営軽便鉄道は、大正11年（1922）に野田醤油醸造組合が県から払い下げを受け、北総鉄道として新たにスタート。

その後、路線も船橋まで延長されました。

北総鉄道はその後、昭和に入って総武鉄道（その後、東武鉄道に合併）に名前を改めています。



醤油の輸送も船運から陸路に（昭和4年）

しかし、大正12年（1923）の関東大震災で醤油の輸送に大きな変化が起こりました。

明治30年（1900）以来、町内で活躍していた人車鉄道も大正末期には廃止となり、舟運もこのころから次第に陸路のトラック輸送に替わっていきました。

《昭和時代》

大正時代末期から昭和時代初期にかけて、現在も残る野田の歴史的な建造物が相次いで建築されています。

主なものに、茂木佐平治邸（大正13年・現在の市民会館）、野田商誘銀行（大正15年・現在の千秋社）、キッコーマン本店（昭和2年）、興風会館（昭和4年）、野田町駅（昭和4年・現在の野田市駅）、中央小学校（昭和3～7年）などがあります。

あす野田市誕生

人口四万、縣下八番目の市

市制施行を伝える新聞（昭和25年5月2日朝日新聞）

昭和25年（1950）には、野田町、旭村、梅郷村、七福村の1町3村が合併し、新たに野田市として市制をスタートしました。さらに、同32年（1957）には川間、福田両村を合併、現在の形となりました。

愛宕神社と西光院・勝軍地蔵堂

野田市神社（教会）之部

◇中央地区（元野田町）

愛宕神社（旧村社、野田字愛宕裏、七二五）

祭　神　迦具土命

祭　儀　例祭十月二十四日、元旦祭一月一日、祈年祭二月二十四日、神嘗祭十一月二十四日、大祓十二月三十一日

社　殿　本殿（権現造、木造銅板葺、九坪余＝二・五×三・八間）

御門（四足造、木造瓦葺、壱坪余＝一間×七尺五寸）

神楽殿（破風造、木造瓦葺、四坪余＝一〇×一五尺）

奉楽殿（破風造、木造瓦葺、五坪＝二×二・五間）

社務所（破風造、木造銅板葺、壱坪七八＝八×八尺）

手水屋（破風造、木造銅板葺、壱坪余＝七×六尺）

なお、本殿開扉裏絵に「嘉永六癸丑年六月吉日、狂斎伊白栄画」の唐獅子に水仙、梅、桃、牡丹、菖蒲、菊の絵あり。

東　門　鳥居、石造壱開（八幡台輪造、石額共）、刻銘「元禄七歳（一六九四）十一月吉日、作者江戸深川吉藤七左衛門、下総國庄内領野田町惣氏子」

正　門　大鳥居、石造壱開（神明造）、刻銘「大正十一壬戌年（一九二二）十月吉辰建之、為記念茂木啓三郎敬書、十六代石工古谷津浅治郎、四代髙鈴木清五郎」

境内地　八六七坪（神社有地）、一八一・二八坪、借地（私有地）基本財産三四万二千余円

(十)野田愛宕山は、口碑によると、延長元年に山城国愛宕山から、訶具土命の神霊を分って、この地に祀ったと伝えられています。往時は、愛宕大権現と称しました。別当西光院の文書によりますと、愛宕神社の再建は、文政七年、西光院十九世住職真海の発願によって、二十世住職実相が完成したもので凡そ十年の歳月を費しています。そして二十三世栄存を最後として社寺を分離したものであります。

当時山城国愛宕山は、密教の道場として訶具土命を祀り、本堂に将軍地蔵菩薩を安置して本地とし、愛宕大権現と称していました。これは、我が国に仏教が渡来して神仏混淆の風が流布いたしまして、養老年間に藤原武智麿が神宮寺を造り、神社仏閣を並行させて読経祈祷をいたしましたので、全国的に神宮寺が出来るようになったのであります。又、僧行基、空海が本地垂迹を唱えはじめました。神仏は元来同体で印度は神の本地で、日本は垂迹なりとする説であります。山城国愛宕山はこの本地垂迹の典型的な道場でありました。野田愛宕山が祭祀当時から神宮寺としての建立であったかは、いまだ判然としていませんが、西光院が別当として存立し、社僧として神事を修し、神社事務を執り、祈願祈祷の護摩を修し、愛宕本地としての霊符を頒っていたので、当所からの建立説も考えられないことはありません。後代ではありますが、境内には野田山神宮寺愛宕別当西光院の記念碑があります。明治元年に本地垂迹説が否認され、神仏分離の令によって、神仏合祀は廃止されることになりましたので、愛宕神社でも神殿より将軍地蔵尊を下げて、後方の延命地蔵堂に合祀されたのであります。明治四十三年、蒼翁こと初代茂木啓三郎氏の発願によって、延命地蔵を横に移動させ、新しく堂宇を建立して、将軍地蔵尊として祭祀したものです。そして野田愛宕山は本地垂迹の現存する典型的な遺跡として、全国的にも珍らしい貴重な資料とされています。

（千葉県野田郷土史）

◇東側にある鳥居は、野田に於いては最古のもので、元禄七年十一月の建立です。作者は、江戸深川石屋長左衛門、庄内領野田町氏子等が建てたものであります。

■愛趣園（あいしゅえん）

愛宕神社境内の本来の名称は「愛趣園」といいます。明治34年秋から同35年にかけて続いた異常気象で、近郊の農民たちが非常に困窮していたときに、初代茂木啓三郎氏は一族と相談して、慈善事業団体である「至徳会」を結成し、その救済にあたりました。

しかし、救済といってもただお金やものを恵むというのではなく、公園の築造ということを考え、老若男女を問わず、一定の賃金を出してみんなで造園したもので、後に愛趣園と呼ばれるようになりました。

■至徳泉・原泉混々の碑（しとくせん・げんせんこんこん）

「至徳会」では、造園工事のほかにも突抜井戸「至徳泉」の試掘を行い、水道事業の先駆となりました。工期は18か月以上かかりましたが、明治37年8月23日に初めて水が噴出し、人々は大変感激しました。

現在は水は出ていませんが、その地には先人の偉業をたたえ、伊藤博文の筆跡である「原泉混々」の碑が建てられています。

■野田町刻銘地蔵供養塔

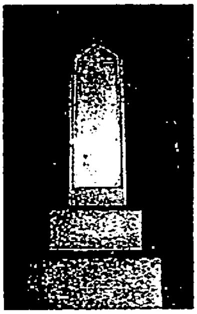
寛文２年(1662)造立と銘文にあり、金石文に「野田町」の文字が現れた最古のもので「奉造立地蔵菩薩為念佛供養同行四十三人也 寛文二壬寅年八月十六日願主野田町長右衛門敬白」と刻まれています。高さは155cmで、幅は53cmあります／野田市指定文化財

■永享5年弥陀種子板碑

昭和６年７月に、愛宕駅前橋梁工事によって発掘されたもので、種子の下には僧侶名が連刻され、永享５年(1433)11月20日と記年されています。

板碑とは一般的に墓標や塔婆と同じ意味をもつもので、鎌倉時代に始まって、戦国時代末には姿を消していきます／高さは120cmで、幅は32.5cmあります。弥陀一尊／野田市指定文化財

野田町刻銘地蔵

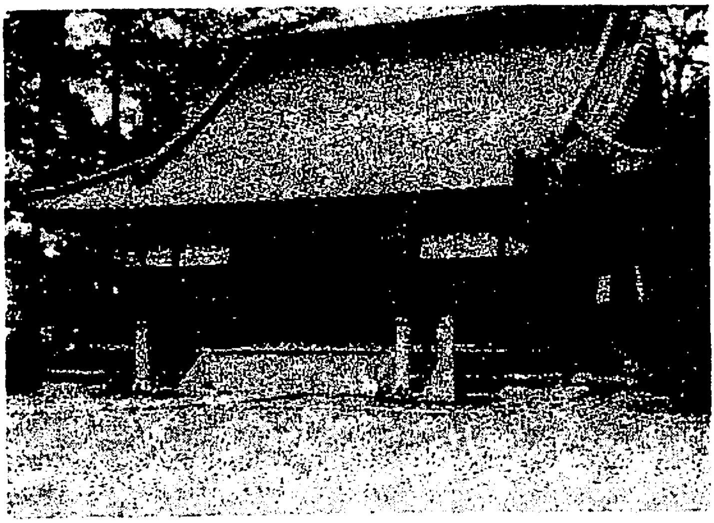


永享５年の板碑

野田市寺院之部

◇中央地区（元野田町）

西光院（野田字愛宕裏、七二六）



宗　派　新義真言宗豊山派、長谷寺末、野田山西光院（昭和十四年九月十日金乗院より本寺換）

住　職　現住職、第二十八世勝田光宥（野田七二六）

本　尊　聖観世音菩薩

建　物　本堂（入母屋造、木造平家、瓦葺、五〇坪）
仏堂（入母屋造、木造平家、瓦葺、二八坪）
庫裡（木造平家、亜鉛葺、六三坪）
（以上昭和二十八年調）

梵　鐘　鐘楼共、刻銘「愛宕山西光院、昭和二十八年五月吉日、当山廿八世勝田光宥、鋳物師小田部庄右衛門、彫刻師森龍」

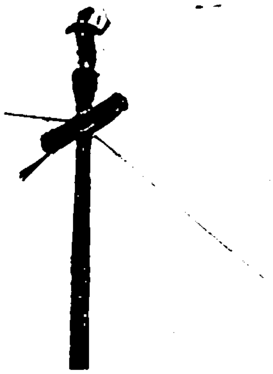
奇祭『津久舞』(県指定無形民俗文化財)

⑤ 野田の津久舞

上(かみ)・仲(なか)・下町(しもちょう)の野田三か町の夏祭りの中日(なかび)に演じられる民俗行事で、水神信仰にもとづく雨乞の神事といわれています。

先端に一斗樽をかぶせた、高さ12～13mほどの白木綿で巻かれた柱を立てて、ジュウジロサンと呼ばれる白装束に雨蛙の面を被った演者が、柱や樽の上、柱から張った綱の上などで軽業を演じるものです。

演じられる場所は毎年変わり、西光院境内、茂木佐公園、キッコーマン駐車場などです／千葉県指定無形民俗文化財

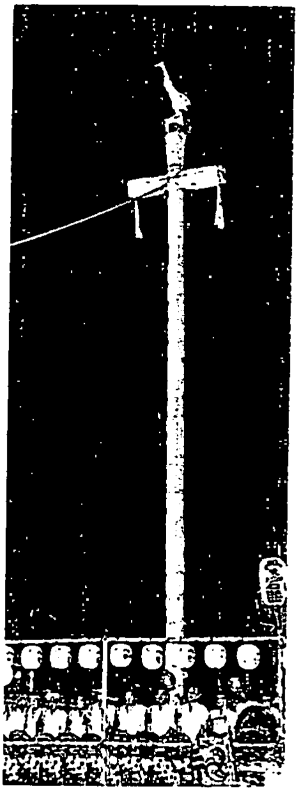


津久舞は夜に行われます

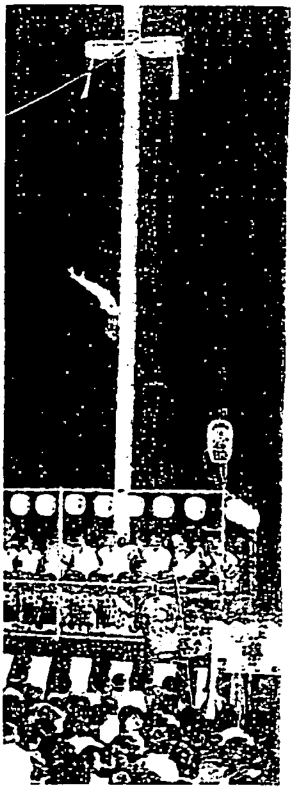
茨城県龍ケ崎市や、千葉県野田市などに伝承されている郷土芸能「つく舞」については、それぞれの郷土史家たちの手によって研究され、いろいろの説がたてられているものの、まだ人を説得させる程のものはない。

曰く、つく舞は妙見の土俗。津(河岸・港)の宮の祭礼。船頭たちによる帆柱の曲芸。ツクは柱のことなど。

そしてまた、つく舞が現在行なわれている地域も、龍ケ崎と野田だけに限定している人も多いようだが、つく舞と称するものは、現在、千葉県だけでも多古、旭にその存在が確認されており、更に形態の似た行事は、長崎市若宮神社の竹ん芸、神奈川県日向薬師の神木登り、福岡県苅田町等覚寺の松会などに現存し、ここに廃絶したものを加えると、古来、つく舞に類する行事はかなり多く行なわれてきたことがわかる。その意味で、この郷土芸能「つく舞」についての探究は、もはや等閑にできない課題となってきているといわなければならない。



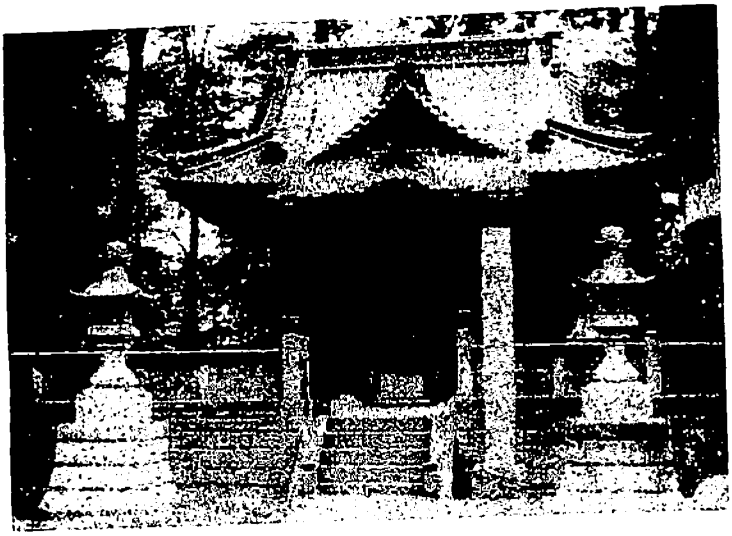
野田の津久舞 (1980.7.16)



野田の津久舞 (1980.7.16)

勝軍地蔵堂（野田七二六）

住　職　勝田光宥
本　尊　勝軍地蔵尊
本　堂　木造瓦葺、方三間（明治四十五年三月七日改築落成）
堂　額　宝珠に龍の彫刻ある木額、「将軍地蔵尊」＝護国寺貫主権大僧正義海敬書。書き分けの木額「将軍」は十一代茂木七左衛門、初代茂木啓三郎奉納。将（碧海祐享書）、軍（乙巳春東郷書）



沿　革

元町内氏神愛宕大権現の本地仏で、地蔵菩薩が武装して軍陣にあらわれる思想は「蓮華三昧経」に説かれ、この経典が、鎌倉時代にわが国に伝わって以来、武家の間で信仰された。身に甲冑をつけ、右手に錫杖を持ち、左手に如意宝珠を載せ、背に後光を負い、軍馬に跨がるもの。これを念ずれば戦に勝ち、宿業、刀兵、飢饉を免がれるというので、本尊もまた終戦前一時大いに市民の尊崇をあつめた。

現在の堂は西光院第廿七代住職光法の代茂木啓三郎の発願によって明治三十九年中に造立されたものであるが、もと神仏混合時代には愛宕神社に合祀されており、明治初年神仏分離令によって、明治七年六月廿四日寺院へ分離一時延命地蔵堂（金石資料集参照）に合祀、本堂改築によって現地に遷座されたのである。西側に壱宇があるが、これはもとの仮堂で現在荒廃しているがその中に次の「絵馬」がある。

諸献碑

△「新勝講」の碑、刻銘「昭和十五庚辰年四月建之、武運長久、講中安全。埼玉県大沢町新勝講、講頭倅田兵次郎」

△「鶏魂碑」（川島正次郎書）刻銘「昭和三十四年九月二十九日建之、発起人野田市養鶏農業協同組合、北総養鶏組合員百十五名、石工杉崎弥八」

野田と醤油

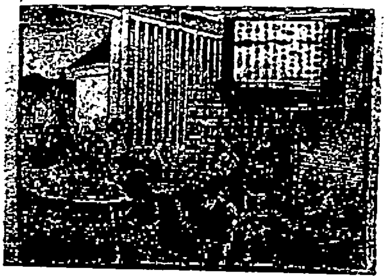
野田での醤油醸造は、室町時代、永禄年間(1558～70)、飯田市郎兵衛が、溜醤油を造ったのがはじまりとされています。近世の醤油の醸造は、寛文年代(1661～1672)に創業した高梨兵左衛門家を皮切りに、18世紀中に多くの家が醤油醸造を開始しました。

天明元(1781)年には、高梨家・茂木家を中心に7家で「野田造醤油仲間」が結成され、幕府や江戸の問屋との交渉にあたるなど、同業者が団結して醸造業を発展させました。

文政年間(1818～1830)に入ると、菱垣廻船や樽廻船によって、大量に運び込まれていた関西の醤油にとって代わり、関東産の濃口醤油が、大消費地江戸の需要を賄うようになりました。

さらに、野田の醤油は、江戸川・利根川の水運という恵みを受けて、原料調達・製品の運搬で優位に立ちました。

また、高梨兵左衛門家と茂木佐平治家の醤油が、幕府西丸(本丸・西丸)御用醤油にもなり、醤油番付でも野田の醸造家が上位を占め、質量ともに他の産地を圧倒するようになりました。



下総國醤油製造の圖・三代目広重

大正時代初期の醤油醸造場

大正時代の樽材置場

明治期に入ってからは、高梨家・茂木家による醤油醸造は日を追って盛大となり、明治20(1887)年には野田醤油醸造組合を結成しました。

大正期は、第一次世界大戦による大戦景気を生み、醤油業界もまた好況に恵まれて、大正6(1917)年には茂木一族と高梨一族の八家合同による野田醤油株式会社が誕生しました。

野田の醤油発祥地

（のだ　しょうゆはっしょうち）

マップＣ24

野田市野田688-10ほか／社会教育課☎04-7123-1366

野田でいつごろから醤油造りが始まったかは、定かではありませんが、伝承によれば室町時代後期の、永禄年間(1558～1570)に飯田市郎兵衛によって始められたともいわれています。

旧飯田家の工場跡(亀屋蔵)には、その由緒を記した記念碑が残されています／野田市指定史跡

亀屋蔵跡に建つ発祥地の碑

●まめバス「北・中ルート・上町」下車徒歩約１分・東武バス「小学校前」下車徒歩約１分

興風会館

（こうふうかいかん）

マップＤ25

野田市野田250／☎04-7122-2191

昭和４(1929)年の竣工当時は、千葉県庁に次ぐ大建築であったといわれ、建築様式はロマネスク調を取入れた近世復興式のものです。

館を運営する財団法人興風会は、昭和３(1928)年11月、株式会社千秋社(→P72参照)からの寄付によって設立された公益法人です。

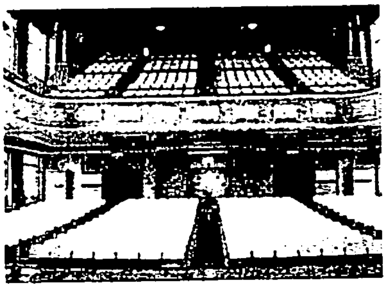
現在、育英事業、義務教育振興事業、社会教化事業の３つを中心に事業を進めています。

また、あおいそら運動推進委員会や小さな親切運動野田支部など、各種団体の事務局も置かれています。

会館は、大・小講堂、地下ギャラリー、集会室などを備え、一般に開放されています。

設計者の大森茂氏は、神田駿河台の明治大学旧校舎や旧細川公爵邸(和敬塾本館・都文化財)などを設計した人で、デザインの巧みな建築家として知られています／国登録文化財

●まめバス「南ルート・キッコーマン前」下車徒歩約１分・東武バス「キッコーマン前」下車徒歩約１分



昭和初期の雰囲気を今に伝える大講堂

⑩ キッコーマン給水所

工場で利用する以外にも、町内の防火用水として、また町民への飲料水の供給等も考慮して、野田醤油㈱では大正10年(1921) 4 月に地下水を汲み上げるために第一号さく井工事に着手しましたが、予定の量を得るにはいたりませんでした。

しかし、同年 8 月 1 日には第二号さく井工事に着手したところ、予定の水量を得て、同11年1月には水道敷設工事を起こし、同12年(1923)3月に初めて通水、さらに各戸給水の追加工事に着手しています。

現在も給水塔は残っています

そして、大正12年 3 月から自社工場や地域住民を対象に給水を始め、昭和50年 4 月に野田市に移管されるまで、実に50年以上にもわたって水道事業を民間会社が経営してきました(中は見学できません)。

⑯ 野田町駅跡

明治44年5月、千葉県営軽便鉄道として、野田一柏間が開通した時に野田町駅があった場所です。

昭和 4 年に現在の野田市駅の場所へ駅ができたのを機に建物は、昭和 5 年に川間駅に移築され、昭和46年まで現役で活躍しました。

⑥ 茂木佐公園

茂木佐平治氏の所有地ですが、大正15年 5 月から一般に開放されている児童遊園地です。

中央に塔柱があり「遊楽園」と刻まれています。

また、毎年11月ごろに紅葉する大銀杏は、迫力があります／所在地＝野田市野田350

紅葉した大銀杏は見事です

■釈迦堂

木造方形造廻廊付瓦葺の建物で、茂木佐公園内ります。建物の周囲には行徳の彫刻師・後藤直光作る「十二支の彫刻」があり、見事なものです。創建は大正末期ころです

野田市郷土博物館(のだしきょうどはくぶつかん)

マップＤ24

野田市野田 370 ／☎ 04-7124-6851

昭和 34(1959)年 4 月に開館した県内で最初の本格的な博物館です。

建物は、京都タワーや日本武道館などの設計で知られる建築家・山田守(やまだまもる)氏(1894 ～ 1966)によるものです。

主な展示・収蔵品は、醤油関係資料、郷土に関する歴史資料や民俗資料、市内外の遺跡から出土した考古資料等があります。中でも、醤油関係の資料の豊富さは他に例がなく、全

建築家・山田守による設計

国的にもユニークな博物館として知られています。また、野田出身の作曲家・山中直治(→P 63 参照)の展示コーナーも常設しています。

さらに、毎年秋には郷土に密着したテーマで特別展(企画展)や博物館セミナーなども開催します。

【開館時間】午前 9 時～午後 4 時／【休館日】毎週月曜日、年末年始／【入館料】無料

●まめバス「中・南ルート・仲町」下車徒歩約５分・茨急バス「仲町」下車徒歩約５分

市民会館（しみんかいかん）

マップD24

野田市野田370／市民課☎04-7125-1111(代表)

廊下から望む庭園も必見です

醤油醸造を代々の家業とした茂木佐平治家の邸宅として大正13(1924)年ごろに完成しました。

昭和31(1956)年10月、キッコーマン株式会社の前身である野田醤油株式会社を経て市に寄贈され、昭和32(1957)年1月15日に市民会館として開館しました。

庭園に囲まれた純和風の趣きのある家屋は、瓦、柱など全て特別に注文したもので、寄贈される前は「書院」・「離れ」・「ご婦人室」などと呼ばれた建物があり、さらに大規模な邸宅でした。

隣接する茶室「松樹庵」は、明治初期に元の茂木佐平治邸に建てられたものです。昭和初期に解体され、昭和43(1968)年には別の場所へ再築、その後、市が寄贈を受けてこの地へ移築し、昭和59(1984)年に市民の茶室として開庵したもので、茶会や歌会などに利用できます／国登録有形文化財

落ち着いた風情の正面玄関

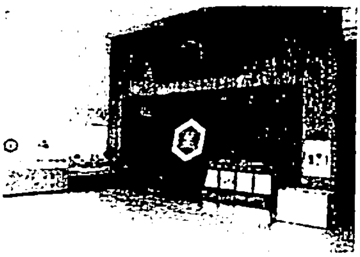
【開館時間】午前9時～午後9時／【休館日】月曜日、年末年始

●まめバス「中・南ルート・仲町」下車徒歩約5分・東武バス「仲町」下車徒歩約5分

キッコーマンもの知りしょうゆ館　マップE25

野田市野田110　☎04-7123-5136

平成3年5月に完成した「もの知りしょうゆ館」では、醤油ができるまでの工程を映像と実際のラインの見学によって知ることができます。



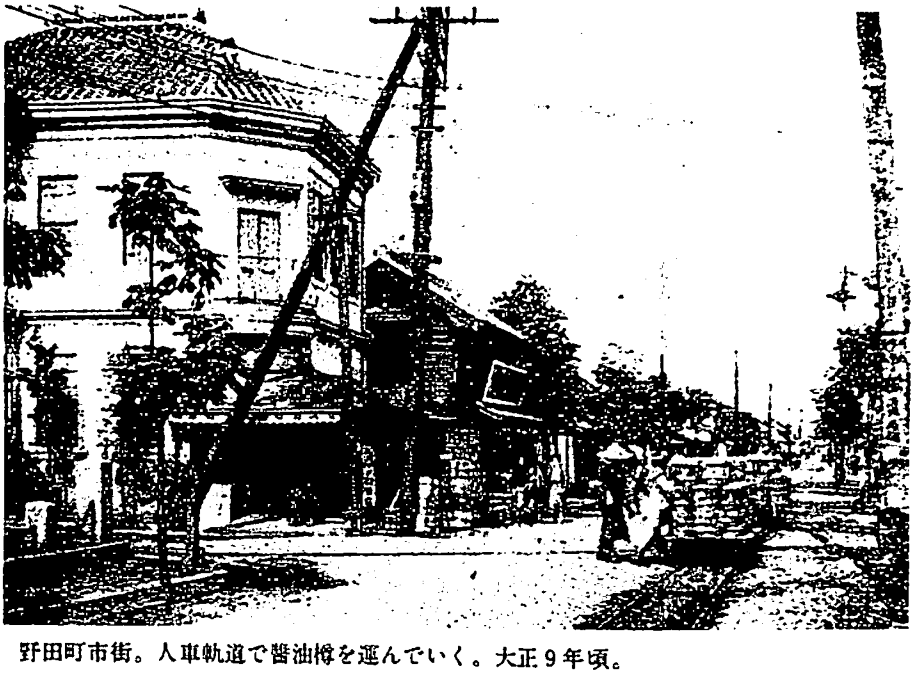
人車鉄道

これまで述べた鉄道のほか，人車軌道（人力で線路の上を押していくトロッコに客車体を取り付けたようなもので，4～10人がようやく乗れる程度のもの）として野田人力車軌道が，野田町上町～梅郷村今上間（3.5キロメートル），中野台～河岸間（1.5キロメートル），下町～野田町駅前間（0.4キロメートル）を貨物取り扱いのみ（主として醤油原料と醤油）として，明治33（1900）年開業したが，大正15（1926）年廃止となった。

東葛人車軌道株式会社は，明治42（1909）年に中山～行徳間を開業した。開通の年には50台の車を持ち，続いて明治44年に中山～鎌ケ谷間を開業したが，利用客は1日当たりにすると，100人程度に過ぎず楽な営業でなかったろうと想像できる。大正7年全線（10.9キロメートル）が廃止となった。

他に，同じく東葛人車鉄道が明治43（1910）年に鎌ケ谷～深町間を開業したことが記録されているが，廃止時期は不明である。

これら廃止となった人車軌道は，開業当時から採算性が悪かったといわれている。



野田町市街。人車軌道で醤油樽を運んでいく。大正9年頃。

ざいだんほうじんたかなしほんけかみはなわれきしかん
財団法人高梨本家上花輪歴史館

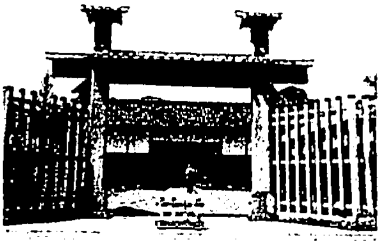
マップC26

野田市上花輪507／☎04-7122-2070

国指定名勝の髙梨氏住宅と庭園

江戸時代に上花輪村(現在の野田市上花輪)の名主を務め、17世紀から醤油醸造を家業とした高梨兵左衛門家の邸宅です。

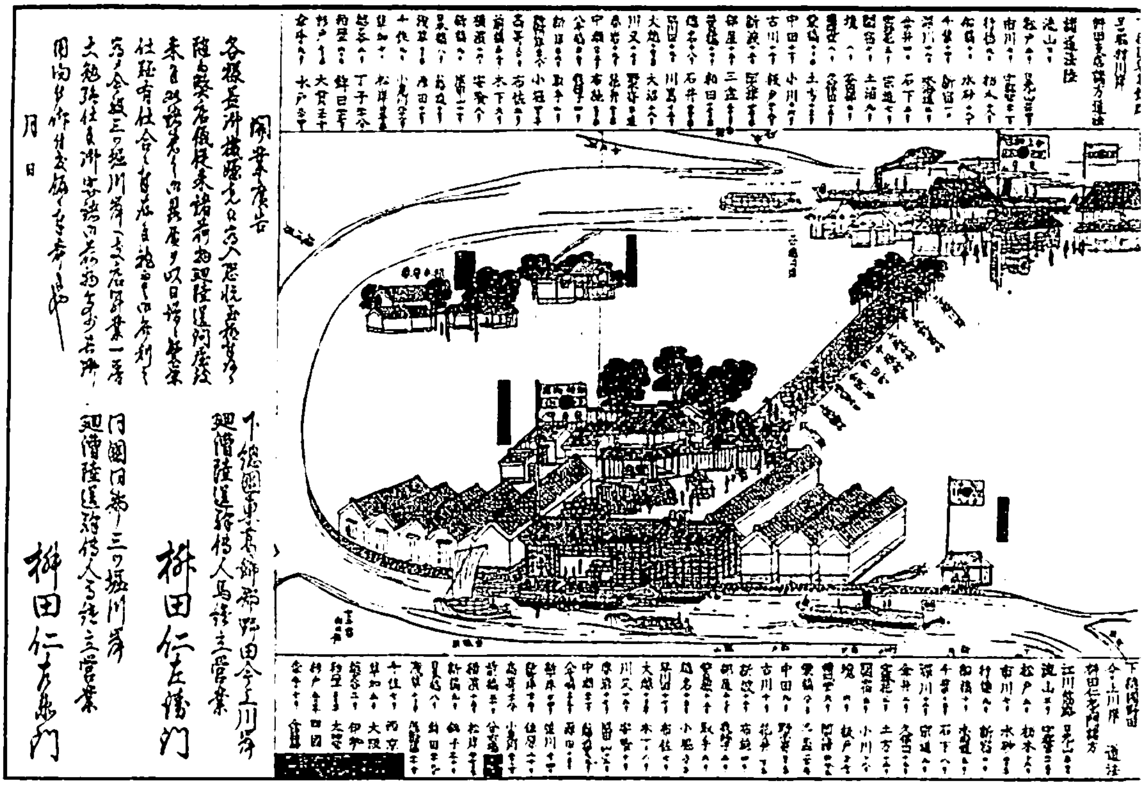
タブノキに象徴される豊かな屋敷林を背景として、敷地内には「書院」、「門長屋」、「籾蔵」「茶室(眺春庵)」、「構堀」など、江戸時代以来の建築物がみられ、江戸時代後期のこの地方における豪農の屋敷の雰囲気がよく残されています。庭園は昭和初期に完成しました。



展示棟では、醸造用具や生活用具などが展示されているほか、毎年テーマを決めて企画展を実施しています／国指定名勝／【開館期間】3月1日～11月30日／【開館時間】午前10時～午後5時(3・10・11月は午後4時まで)／入館は閉館の40分前まで／【休館日】月・火曜日(祝祭日の場合は休館日変更あり)／【入館料】大人500円、小人(6歳以上19歳未満)300円(団体割引有)※未就学児は保護者同伴で

●茨急バス「香取神社」下車徒歩約5分

下河岸廻船問屋桝田家の広告



㉘ キッコーマン御用蔵

醤油の城とも呼ばれる御用蔵醤油醸造所「御用蔵」は、本格的な「城」と物を保存する「蔵」が見事に調和した建物です。

宮内庁御用達を預かるこの御用蔵は、昭和14年3月にキッコーマン株式会社の創立20周年を記念して竣工したもので、ここで造られる醤油は、江戸時代からの伝統手法を継承した、天然醸造、本醸造方式により造られています。

通常、中は見学できません／問合せ先＝キッコーマン(株)広報部・☎03-3233-5111(代)

江戸川土手から見た全景

参考資料

「野田紀行」　野田市発行　　平成17年3月31日
「野田発見」　野田市商工課
「野田市宗教施設総覧」　野田市史編さん委員会　昭和44年3月31日
「野田の醤油」　野田地方文化団体協議会　昭和48年6月1日
「のだし」　佐藤　真著　聚海書林発行　　昭和56年9月25日
「野田町誌」　国書刊行会発行　　昭和61年12月20日
「利根川流域のつく舞」　龍ヶ崎市歴史民俗資料館　平成6年6月

=メモ=